

## 入選

### 自分ではないだれかのために

静岡県 清水入江小学校 3年 高田 莉彩

わたしは、家のむかいのおばちゃんとなかよしだ。そのおばちゃんは、いつもニコニコしながら、わたしに声をかけてくれる。学校の帰りに会ったときなど、いっしょに歩きながら、いろいろな話を聞かせてくれる。おばちゃんは犬をかっていて、そのさんぼ中のできごとを話してくれた。

その日、おばちゃんはいつものように犬のさんぼをしていると、遠くでたおれているおばあさんを見つけた。だれかに知らせようと思ったけれど、まわりにだれも見当たらなかったため、自分が走ってかけつけたという。

早くしなければ、そのおばあさんはたすからないと思い、ひっして走ったそうだ。そのおかげでおばあさんはたすかったけれど、おばちゃんは走ったせいで心ぞうがいたくなってしまったらしい。おばちゃんは、心ぞうが弱かったのだ。

おばちゃんは、自分の心ぞうが弱いとわかっていながら、なぜ全力で走ったりしたのだろう。わたしだったら、自分の心ぞうの方が大事で、われをわすれて走るなんてできないかもしれない。でもおばちゃんは、たおれているおばあさんを見つけたとき、「思わず」走ってしまったのではないか。自分の心ぞうのことより、おばあさんをたすきたい気持ちが、しぜんにおばちゃんのからだをつき動かしたのだろう。

わたしは、心ぞうがいたくなってしまったおばちゃんの話は心ばいだったけれど、おばあさんをむちゅうでたすけようとしたおばちゃんが、なんだかカッコいいと思った。もしわたしなら、自分のことより先に人のことを考えることができるだろうか。わたしは、だれかのためになりたいと思っても、まず先に自分のつごうを考えてしまう。

「今、時間がないから」というのは、やっぱりいいわけなのかもしれない。おばちゃんは、いつも「親切にしよう」と思っているのではなく、おばちゃんの心にしみついているやさしい気持ちが、しぜんに親切につながっているのだろう。「親切」は、「やろう」と思っていることではなく、人が自分ではないだれかのことを大切に思ったとき、はじめてできるのではないかな。自分のためだけだとげんかひがあって、そこに「だれかのために」ということがくわわると、人はもっとがんばれるのかなと思った。

おばちゃんは夏、心ぞうの手じゅつをして、元気になって帰ってきた。またいつものように、ニコニコしながらわたしに声をかけてくれる。これからも、たくさんおばちゃんの話を知りたいと思う。そしてわたしもいつか、「自分ではないだれかのために」になりたい。